

巻頭言 「悲しみから生まれる」

宇野 元

K 姉は、音楽的なご家族のなかに育ち、ご自身ヴァイオリンを演奏されました。最晩年には音楽を聴くことをたのしみとされていました。バロック音楽、なかでもコレルリの作品がお好きでした。コレルリといえば、バッハやヘンデルをはじめ、のちの世代にたいして大きな影響を与えた人として知られますが、緩急による曲の組み立ては、華やかにはじまる系列と比べて地味で、輝かしさとともに穏やかな趣があり、つつましさを感じさせてくれます。K 姉のお人柄とどこか重なるように思われます。コレルリの有名なヴァイオリン曲「ラ・フォリア」La Follia も控えめに始まります。速い部分においてもけっして枠を越えません。しかし、なんと情熱に溢れていることか。聴くたびに、内部に火花のようなものが感じられます。

——音楽は悲しみから生まれているんだよ。舞踏もそうだ。悲しみが根源にある。須磨海岸でビートルズの「ブラックバード」を歌ってくれた友人が、そう教えてくれました。時折フラメンコギターを聴いていると私が伝えたときに、フラメンコギターを聴くようになったのは、様々な音楽遍歴を経てフラメンコに行き着いた今は亡き昔の友の面影とむすばれています。「ブラックバード」を歌ってくれた友人も悲しみをよく知っています。

聖書の詩編は人間の心のあらゆる部分の解剖図である、とカルヴァンが述べています。「あたかも鏡に写すようにその中に描写されていない人間の情念は、ひとつも存在しない。」続けて次のように書いています。詩編にはしばしば、祈ろうと骨折る姿が示されている。それは、疑いや不安に揺れ動かされている自分に気づくたびに、これに抗し、戦い、妨げから自由になるためである。それだけでなく、激動と恐れとおのきのさなかにあっても、支えられるためであると。祈りについてはこう述べています。真剣な祈りは、まず祈りの必要を感じるところに、そして神の約束を確かに信じることから始まると。

「ラ・フォリア」に耳をすましていると、この曲も悲しみと関係していると思います。詩編第42篇が悲しみと切り離されていないように。また、この詩篇の祈りに似ていると思います。「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ、なぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう、『御顔こそ、わたしの救い』と。わたしの神よ」（詩編42, 6, 12）。悲しみに心を沈ませず、上に引き上げてくれる力が存在します。神に呼びかけ、神の言葉に支えられるよう導かれます。